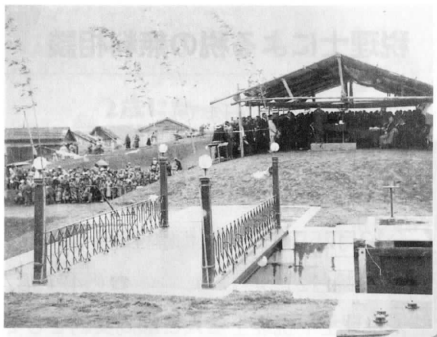
香取遺産

vol.149

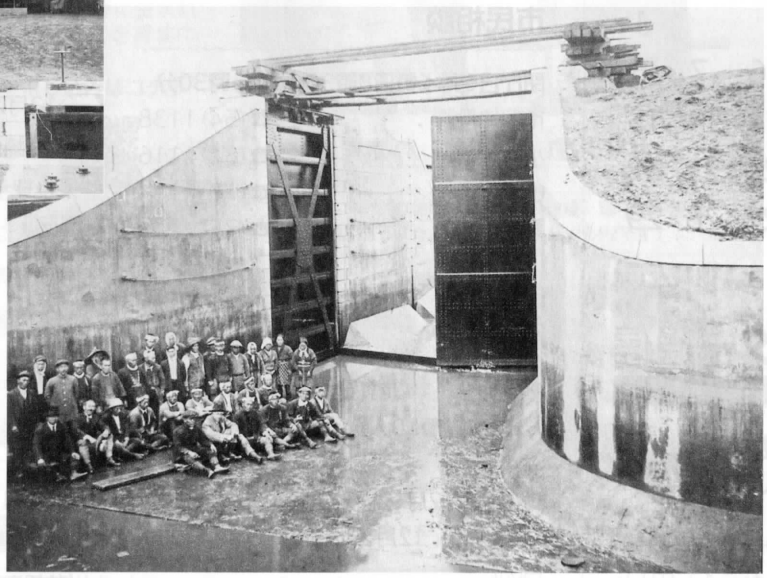
利根川改修工事の産物

―初代の小野川水門―



▲完成した跳開橋

▲利根川改修の半纏



▲建設中の小野川水門（大正11年6月）

店蔵造りの重厚な店舗や土蔵などの多くの建造物が立ち並ぶ佐原の町並みは、歴史的な景観を今に伝える地区として、平成8年（1996）に重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。その町並みを形成する要素の一つに小野川があります。佐原の町並みの中央を南北に流れ、利根川に注ぎ込むこの川は、古くは大川、佐原川とも呼ばれていました。江戸時代の利根川舟運の発達により江戸と通じた佐原は河岸として栄え、小野川沿いにはだしと呼ばれる船着き場が並び、多くの船が行き来していました。

現在、小野川が利根川に合流する地点には、小野川水門が設けられています。高さ8・85m、幅10mの扉を持つ水門で、通船や逆流防止、自然排水を目的に、昭和43年（1968）3月に竣工しました。この水門は、昭和33年（1958）に利根川増水により、小野川が氾濫し、災害救助法の適用を受けるほどの被害があったため、建設されたものです。

ところで、この小野川水門は二代目の水門で、これ以前の初代の水門は、内務省により明治33年（1900）から昭和5年（1930）にかけて実施された「利根川改修工事」で建設されました。

着工は大正8年（1919）11月で、杭打ちや基礎工事、側壁工事、門扉工事、橋梁工事などを経て、大正12年（1923）3月に竣工しました。設計者の宮本武之輔は、明治25年（1892）愛媛県温泉郡興居島村（現松山市）出身で、大正6年（1917）に東京大学を卒業後、内務省に入省し、利根川第二期改修事務所、荒川改修事務所などに勤務しました。

この水門は、逆流を防ぐための逆水門扉を備えた特殊なもので、水門の上に小野川橋と称した鉄製の橋が架けられていました。宮本の設計報告によれば、この橋は単葉式の跳開橋の型式を採用した、とあります。片開きの跳ね橋で、橋脇に設置されたハンドルを回すことで、橋の片方が跳ね上がり、橋の下の水門を船が通れる仕組みとなっていたようです。設計段階では、工費は14万1千円と見積もりされましたが、実際の総工費は13万8千円となったようです。

問 生涯学習課 ☎(50)1224